会員投稿

学校の動物飼育から見えること

熊谷さとし

現在，出版社の企画で，学校飼育動物の現状を把握するために，日本各地での講演や学会に参加したり，小学校のワークショップを見学したりしている．私自身，長いこと「野生動物」をやってきて，観察会や講演会，執筆と続けてきたが，野生動物は子どもたちにとって一番遠い存在なのだ．

そこで一番近い存在である動物は？と考えていたときに，友人で一緒にカワウソをやっている愛知県の前田獣医から，「学校飼育動物」の必要性と，中川先生たちの活動を教えてもらった．子どもたちはもちろん，先生でさえ「何のためにウサギやニワトリを飼っているのか？」を知らない(考えたことすらない)．聞かれて初めて「癒し」なんて，的はずれの答えを若い女の先生が応える．「飼育担当」は新任の若い女の先生に押しつけられている．いわば，ジャンケンで負けたから仕方なく「飼育担当」をやっているのが現状なのだ．残念ながらこの構図はそのまま生徒に降りてくる．都内某区の講演会では，参加している先生の三分の二が居眠りをしていた・・・「飼育担当」だから仕方なく，アリバイ工作で参加してきたのだろう．

「ニオイが臭い，鳴き声がうるさい」という，近所から苦情のために日当たり悪い裏庭に飼育小屋があり，掃除もままならず，金曜日のウサギは悲惨だ．休日の分のエサをいつもよりも多めに与えられている．ウサギが，多めにエサを与えられても「一部を今日食べて，残りの半分を明日・・・月曜の朝には新しいエサがもらえるはずで・・・」と予知できるのなら，これでもいい．しかもストレスからフンやオシッコをまき散らして，エサがフンまみれになっている．ガキの頃，新雪の上でオシッコで字を書いた覚えのある人ならわかると思うが，自分のオシッコのかかった雪を口にほおばったろうか！？野生状態なら，ウサギはフンやオシッコをまき散らしたりしない．なぜなら，ウサギは食べられる側の動物だから，なるべく捕食者に自分の存在を知らせたくないのだ．そのためにフンは１箇所にまとめてするようにしている．

では，タイマー給餌器を使えばこの問題は解決するか？というとそういうことではない．タイマー給餌器を使うのなら，いっそ「飼育ロボット」がいればいいわけだし，なんならウサギの変わりに「アイボ」を飼えばいい．金曜日になったらスイッチを切ればいいのだから・・．

学校飼育動物で一番教えたいことは「命に休日はない」ということなのだ．産ませっぱなしだから狭い小屋にたくさんのウサギがいる．飼育小屋の床がコンクリートだと「穴を掘れなくてカワイソウ」とか，「たくさん生まれるからいい飼い方だ」という間違いも相変わらず根強い．

まさに「動物として生まれたのだから，去勢をするなんてカワイソウ」といった，最近話題の直木賞作家の子猫殺しと同じ勘違いだと思う．「飼育動物は管理動物だ」という認識がない．と言うことだと思う．

ケンカをしようが病気になろうが，死なせっぱなし・・・たまたま世話をしている子どもが，飼育動物の病気に気がついて担当の先生に相談しても，なしのつぶて・・・困った生徒が先生に内緒で獣医の所に連れてくる．誠意のある先生の場合は，ポケットマネーだ．それとて何万円もかかる手術の場合はそうもいかない．しかし獣医としては，「病気になったウサギをナントカしたい」という気持ちを尊重したいので，どうしてもボランティア診療になってしまう．心ある獣医は，山本周五郎の小説「赤ヒゲ」先生そのものなのだ．

この現状を知ってか知らずか，文部科学省は，児童への「命の教育」のための教材として，学校飼育を奨励している・・・．

しかし，この学校飼育動物の悲惨な現状に一部の獣医たちが声を上げた．地元の獣医師会をまとめ，教育委員会や行政向けに講演会を開催したり，「学校獣医」として訪問して健康診断をしたり，現場の先生や子どもたち，ＰＴＡを相手に飼育のためのワークショップを開いている．ワークショップで初めてウサギを抱いたという飼育委員会の子どももいれば，背骨が折れて脚がだらんとしてうつぶせになっているウサギを見て「卵を産んでいる」と発言する６年生がいたりするのを見ると，30年も動物の本を描いてきた俺の仕事は何だったのだぁ！？と叫びたくなってしまった．まぁ先は長い・・・・．

でもその運動も少しづつ実を結び，ＰＴＡや地域を巻き込んで理想的な飼育をしている学校や，学校飼育動物のために予算をつける自治体も出始めてきた．

先日，京都の学会に参加したとき飼育担当をし

ている現場の先生からこんな話を聞いた．その学校も以前は，ウサギの個体識別はおろか，掃除もいい加減だったために飼育小屋に近付く生徒もあまりいなかったという．

しかし，ワークショップで中川先生の話を聞いたその先生が中心になって，飼育担当の当番を決めたり，定期的な獣医の訪問などで，今では理想的な学校飼育が出来ているという．

生徒たちも，以前はジャンケンで負けたから仕方なく飼育委員になったという子どもが多かったのに，今ではジャンケンに負けて飼育委員になれなかった．という逆転現象すら起きている．

そんな学校に，近くの学校から「ウサギが欲しいと言われた」と校長宛に連絡が来た．それを受けた校長は，事務的に「適当に選んで渡してください」とだけ申し渡したという．校長自体が，学校飼育の重要性にあまり関心がなかったようなのだ．そこでその先生は「子どもたちに聞いてみないとわかりません」と答え，子どもたちに相談した．はたして，子どもたちは，初めは嫌がっていたのだが，「いじめられて仲間はずれになっているウサギを上げればいいのではないか？」などと意見を戦わせ，いつも二羽で仲良くしているウサギを上げれば，環境が変わっても寂しくなくて，ナントカやっていけるのではないか．という結論が出た．子どもたちはウサギを入れるダンボールのそれぞれに，色紙で名前を飾り付け，「お別れ会」を催すことが提案された．その先生は，「お別れ会」に校長も無理矢理参加させることにしたという．学校飼育に無関心だった校長も，さすがに出席しないわけにはいかない．おそらく校長らしく「建前」の話をしたのだとは思うが，きっと校長の心の中でも，子どもたちがどれほどウサギたちをかわいがっていたのかを知る，良い機会だったのではないだろうか．それ以来，学校飼育動物に積極的になってくれたという．もらい受けに来た他校の先生も，そんなセレモニーがあるとは思ってもいなかったから少々面食らってはいたが，飾り立てたダンボールを見て「とても大切に育てているウサギ」をもらい受けるのだ．ということが伝わったようだ．その後も，近況はどうか？こちらではこんなエサをあげていたけれど，という交流があるものだから，さすがにうかつな飼い方はできないだろう．

このように学校飼育動物を「厄介者」にするのも「教材として生かす」のも，予算がないから飼育小屋を新しくできないなどという，ハードの問題ではなく，現場の先生や子どもたちの心ひとつ，ソフトの問題なのだと思う．

この話のように，正しく飼育しようという者がいれば，その思いは次々に伝搬していくものなのだ．学校飼育動物は，子どもたちが「相手の気持ちを思いやる」という気持ちを学ぶためにいる大切な教材だ．

そして実際，正しい指導で飼われている動物のいる学校の子どもの描く絵も，そして作文も全然違う．私が野生動物の講演をしに行った，とある小学校は，劣悪な環境でウサギが飼育されていた．こういう学校には案の定，校庭のブランコに張り紙がある．曜日別に，ブランコを使ってもいい学年が張り出されているのだ．月曜日は１年生・・・火曜日は２年生・・・というように・・・．「貸ぁ～しぃ～てっ！」と下級生が来た場合，貸してくれない上級生がいるために学校がルールを決めたのだ．確かに，子どもの内にルールを守るということを教えるのも教育なのかも知れないが，これはちょっと情け無いだろう？

学校飼育動物というのは，思いの外，子どもたちの心に影響を与えている．ウサギの寿命は６～７年という．だから，入学の時に生まれたウサギは，子どもたちの卒業の時に死ぬ．小学校６年間に，誕生と死に立ち会うことが出来るのだ．こんないい教材は他にあるまい！？学校飼育動物の飼い主は，先生であり，子どもたちであり子どものたちの親でもある．休日飼育などは，地域やＰＴＡを巻き込まないとなかなかうまくはいかない．

現在ある施設に，ちょっと大人たちが関心を向けるだけで180度改善されることなのだ．

抱きしめてみたら暖かく，心臓の鼓動が伝わる・・これら小さな「命の大使」の言葉は，きっと子どもたちの感性に大きく響いていくことだろう．

（学習漫画家　日本野生動物観察指導員）